

ハチクの節の造形について

大賀 二郎*

Modeling of the paragraph of a bamboo

1978年3月12日、故室井綽先生と草木の会一行は、西宮市甲陽園目神山町(甲山山麓海拔220m)の拙宅を訪れた。そのとき室井先生からお土産にハチク *Phyllostachys nigra* var. *henonis* Muroiの株を頂いた。根を切り詰めた高さ30cmほどの株であった。播州地方の廃城の片隅に残っていたものだそうだ。昔、築城時にハチクは植えられることが多かったという。落城のとき、女、子供はハチクの竹槍で、城を取り囲む敵軍に最後の突撃を敢行した。ハチクは手ごろの太さで強靱で軽い。

室井先生から頂いたハチクの株は35年後のいま、小さな藪(写真1)を造っている。竹は50本前後、高さ5mほどに成長している。毎年5月中旬に30本程度の筍(写真2)が思わぬところから現れる。ゆがくと柔らかく風味があり、先生を偲んで賞味している。近所にも分けている。

そのハチクが成長するにつれて不思議なことが起こった。その物語である。ハチクの中では珍しい亀甲の節のあるもの(写真3)が発生し始めた。俗に亀甲竹(キッコウチク)と言われている。筍の時期に料理屋などで珍重されるそうだ。

最近、さらに不思議なことに気がついた。亀甲竹は150cmほどに成長するとその部分は別の造形をする。観察者によっては人の顔に見える。老若男女様々な表情だ。私は人面竹(写真4, 5)と呼んでいる。偶然にそのような造形になっただけで深い意味はないが面白い。一時、鯉に人面鯉というのが現われて話題になったことがある。

ハチクはもともと茶器、花器の材料にされてきた伝統がある。将来、人面竹を工芸品として応用することも面白いだろう。

竹の亀甲や人面の造形は偶発的なものであるが、その形質は進化の過程で固定に到るだろうか。少し考え

てみた。

竹の葉を常食する動物は日本国内には見当たらないが、中国大陸、東南アジア、中南米などの熱帯多雨林には生存する。もし彼等が食用とする竹に彼等が嫌う不思議な造形を見ると、食べるのを避けるだろう。特に哺乳類は竹の異様な造形を認識し、反応するだろう。とすると、竹の節の異常性は種の進化で有利に働く。従って固定化は進む。しかし、そのような人面竹は熱帯多雨林にははびこってはいない。ということは、進化に有利に働いていることはないであろう。竹の鞘を見ずに葉を食すからであろう。あるいは人面を危険として認識しないのであろう。

中南米にアステカアリと竹の共生が知られている。竹は節間の空間をアリの棲家に提供し、その代わりにアリは竹を食害する哺乳類や昆虫類などから護っている。このような共生関係が成立するのは竹を害する動物が存在するからである。

生物はいろいろな造形をとる。人面鯉や人面竹は自然のいたずらで現在のところ意味はない。しかし熱帯多雨林中などの生物多様性の環境では擬態や保護色として進化したものが数多くある。コノハチョウ、ナナフシ、人面カメムシ、メンガタクモ、メンガタズメガ、ユカタンビワハゴロモ(写真6筆者所有の標本を撮影。以下同じ。)、ヨナクニサン(写真7)、フクロウチョウ(写真8)、パラオムシ(写真9)、コブラ(写真10)など昆虫類に多い。鮮紅色、目玉・顔面模様、天敵に似せた模様・動作などは捕食者を警戒させ威嚇する。植物ではラン科植物と昆虫の共進化が良い例である。偶発的な現象でもやがて進化にとって大きな意味をもつようになりはしないだろうか。

なおハチクの節間に現われた人面模様は、ひょっとしたら昔日の城内で気づかれていて、異様なので触れないでいたとも考えられる。

室井綽先生のご冥福をお祈り申し上げます。

*森羅万象の館 博物館学芸員
2014年3月26日受理



写真1 ハチクの疎林(森羅万象の庭の一部で)



写真2 ハチクの筍(同上)



写真3 亀甲竹(同上ハチクに現われる)



写真6 ユカタンビワハゴロモ(爬虫類の雰囲気がある)



写真4 人面竹 a(亀甲竹が成長して人面に変化する)

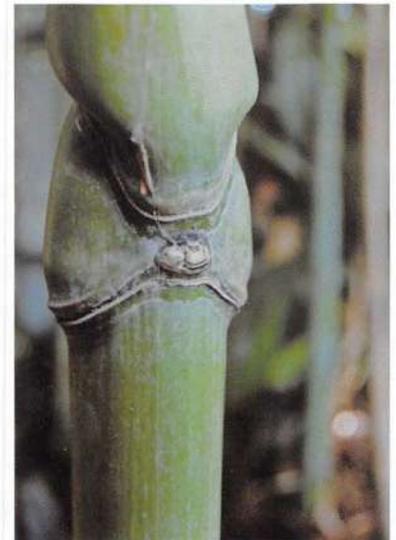


写真5 人面竹 b(同上多様に变化する)



写真7 ヨナクニサン(前翅端にコブラ模様がある)



写真9 パラオムシ(パショウの葉と識別できない)



写真8 フクロウチョウ[翅の裏面がふくろうに似る]

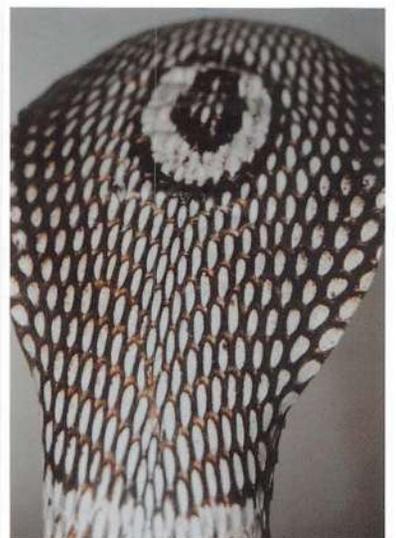


写真10 コブラ(背面に目玉模様毒牙の注意をそらす)